

平成 28 年度福祉教育委員会行政視察

松本市

「福祉ひろば事業について」

高齢者を中心とする市民が住み慣れた地域において、共に支え合う地域社会の実現に向け、住民参加にとって、地域社会の健康、福祉、生きがいづくりの増進を図るための「共助のひろば」の地域福祉の拠点を視察しました。

地域に暮らすひとたちの老若男女の全てが、交流できる拠点づくりを目指して 21 年経過して、地域に根付いた「ひろば」になっていました。

塩尻市として、圏域地域拠点センターでの活動に取り入れていき、ふれあい・世代間交流などにつなぐように、働きかけて、様々な世代の人たちが集い、交流できる場として活動していく必要があると思いました。



北海道留萌市

「農業と福祉の連携による 6 次産業化事業について」

カズノコ・タラコに代表される水産加工都市として全国的に知名度を有している留萌市では、大きなロットの水産加工場が中心の反面、地場の農水産資源は多種多様で、資源量も小さく、それらを原料としての加工は進んでいない状況と、野菜生産の振興、障がい者就労等の支援、廃校利用などの両者がうまく絡み合った事業となって、留萌生まれの農産加工品の生産拠点整備を視察してきました。

地場の農水産物に新たな付加価値を付け、販路開拓を図り、常温販売ができる商品群の開発に、「切り干し大根」の加工工場を視察できました。

障がい者の労働力を取り入れた製品は、作業が丁寧で熱心に加工されていて、コスト的には、大量販売向けには採算が取れませんが、高級料亭などの品質本位の販路には適していて、「スキマ」商売のひとつの例を拝見できました。



北海道滝川市

「市立図書館連携事業について」

滝川市の従来の図書館が、S48年竣工後30数年経過して、老朽化し、また、耐震強度の不足と交通アクセスが悪いので改善要望が出ている等の諸条件があつて、平成18年から図書館移転構想を策定して、企画し、調査・計画後、平成22年の実施設計、平成23年11月12日滝川市役所2階に新図書館をオープンしました。

市役所庁内に移転したことにより、行政との連携が図られ「市役所の中にある地の利を生かす」こともでき、市行政に必要な資料の提供や市政資料等の収集、保存の一元化が図られるなど行政運営の上でも良き効果があることや、市立病院や商店街にも近く、立ち寄り型図書館として、まちなかにぎわいにも寄与できていました。

市役所の2階に移転を決めた要因に、人口の減少問題も絡んでいました。S60の52,829人をピークに年々減少し、H27は41,630人になってしまい、市の職員数や市の組織の規模などの縮小を考慮し、複数階の庁内組織を1階に出来るだけまとめて、2階を空け、図書館にした、ということです。また、他の民間ビルなどの移転先候補もあったが、コスト面もあり、市の2階とされた、との事でした。

図書館の基本方針は

1、出会いといのちの森・図書館

図書館は、本との出会い、情報との出会い、人との出会いを通じて、人と人が絆を深め、支え合う地域社会を構築する事業

2、特色ある図書館づくり

(1) こども図書館～本との出会いの場～

親子がふれあいながら本に親しむ「おはなしコーナー」の設置や「おはなし会」などの普及事業や、学校との連携を図り、子どもたちが本の世界の素晴らしさと出会えるよう読書環境の充実と豊かな子供

文化を伝承する人材育成など様々な取り組み

(2) 情報図書館～情報との出会いの場～

課題解決に必要とする様々な情報提供サービスに、知的生産活動を支援する情報センターとしての機能を持った課題解決に役立つ図書館づくり

(3) 市民協働～人と人の出会いの場～

市民の参加により読書コミュニティの形成と魅力ある図書館づくりとして、図書館の位置づけを目指していました。

その結果、入館者数が、平成 20 年度対比 1.7 倍の 65,000 人に増加し、まちなかなの賑わい創出に直結しました。

それは、従前の図書館の本だけの情報提供だけでなく、多角的な情報収集・発信による「便利で役に立つ図書館」として市民に認知されるようになった。



北海道白老町

「アイヌ文化の創造と発展について」

アイヌは、日本国に暮らす民族のひとつで、東北地方の北部から北海道、千島列島（北方四島とその北の島々）、樺太（今のサハリン）といった地域に古くから暮らしていました。明治時代になって、多数の和入（日本民族）が入植し、隣り合って暮らすようになりました。

アイヌは、周辺の民族との取引をされていて、手に入る魚や海草、動物の肉と皮、ワシの羽根などと、本州や中国と取引をしていました。その取引は、いくつもの民族を介して中国製品を手に入れる「仲介交易」や「物々交換」であって、今の「貿易」や「国際交流」と変わるものではありません。

例えば、北海道産の魚から作った肥しが、近畿地方の綿花を育て、木綿製品になってアイヌにもたらされるなど、お互いの生活に大きな変化を生み出すきっかけになっていました。

やがて、函館付近の和入が勢力を持ち、松前藩となり、交易に多くの制約が課せられ、「アイヌ勘定」や「メノコ勘定」という言葉に象徴されるようなアイヌを見下した交易での騙しなどがありました。

明治時代には、蝦夷地を「北海道」とし、植民政策を始めました。制度の上

で今でも続いている不平等がありました。

千島列島と樺太はロシアとの間で国境が変わりました。しかし、先祖伝来の暮らしから異民族の名前と言葉を使い、異民族の神に祈り、異民族の間で暮らすこととなりました。その新しい暮らしのなかでも、アイヌのこゝろばや物語・歌を後世に伝えようと意識して努力していました。



アイヌ民族博物館